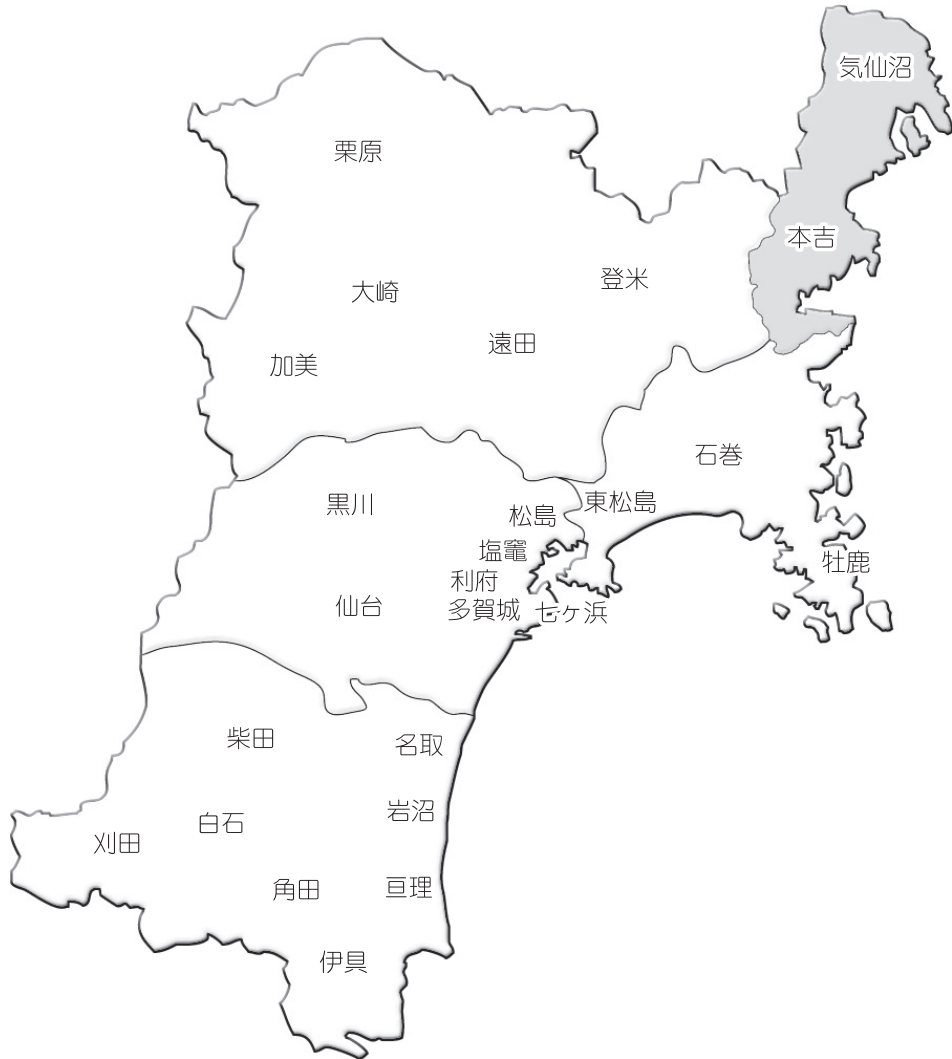


あの日の子どもたち

気仙沼・本吉



青い海なんだよ

気仙沼・小原木 三年 亀 谷 碧 海

「なんで名前に『海』ってつけたの。あの海はぜんぜん青くなくて、真っ黒い海だったよ。しかも、家も車も、みんな持つて行っちゃった。なんで『海』ってつけたの、お母さん。」

三月十一日、わたしが学校でそうじをしているとき、大きなゆれにありました。わたしは、すぐにつくえの下にもぐりました。地しんはなかなか止まず、いつまでも強く大きくゆれ続けました。「早く止まれ、早く止まれ。」

つくえの足をにぎる手にぎゅっと力をこめてねがつていました。「校庭にひなんします。」

そうじの身じたくをきて、上ぐつのまま校庭にひなんしました。毎日何度も通っているろうかや階段なのに、何回も転びそうになりました。いっしょにひなんした友だちがなき出しました。わたしもこわかったけど、

「大じょうぶだよ。」
と声をかけ、いっしょによりそつてあげました。

校庭に出たあとも、何回も何回も地鳴りがして、何度も何度もゆれました。そのたびに校しゃや体育館のまどガラスもがたがたと大きくひめいを上げているみたいで、今にもくずれてしまいそうでした。

（これからどうなるのだろう。家に早く帰りたい。）
と思つていました。

大きなゆれがおさまつて、時間がだいぶたつたころ、校庭には次々とおむかえの人たちが集まつてきました。

（お母さん、まだかな。）
車のエンジン音が聞こえるたび、わたしは音のする方をふり向いてたしかめました。でも、どの車もお母さんの車とはちがつていて、

（お母さん、早く来て。）
と、かなしい気持ちになつていきました。

「お世話様です。すみません。」
という、聞きなれたお母さんの声がありました。

「碧海、大じょうぶだった。」
というお母さんの顔を見たら、ほつとしました。もうすぐ家に帰れると思ひました。

だんだん寒くなつてきて、あたりもだいぶ暗くなつてきました。空には、今にも雪を降らせようとはい色の雲が、わたしたちを見下ろしていました。早く帰りたいと思つているのに、お母さんはぜんぜん帰ろうとしませんでした。

少しして雪がふつてきました。
「寒いから、車の中にいなさい。」

お母さんは、中学校へお兄ちゃんをむかえに行き、そのあとおにぎりつくりの手伝いをしました。そして、わたしとお兄ちゃんにおにぎりを持つてきてくれました。

「ぜつたいに海を見ちゃだめだよ。」
と言つたあと、お母さんはまた手伝いに行きました。

「どうして、海を見ちゃだめだつて言つたのかな。」
わたしは、気になって仕方なかつたので、海の方を見ました。

「お兄ちゃん、あれあれ。」

「家の屋根だぞ。あれ、つ波だ。」

空も海も真っ黒でした。保育園の屋根の上の方に、黒いけむりが見えました。山の向こうがわでは、火事が出ていることを知りました。わたしは、大変なことが起きていることがようやく分かってきました。

「只越が終わっている。」

自分の住む只越が終わっている。何が何だかも分からなくなってきました。

「海は青いはずなのに。大切なものを流してしまうものじゃないはずなのに。」

その日の夜は、家に帰らず、中学校の体育館にお母さんとお兄ちゃんと三人でひなんしました。只越地区のみんなといっしょになつてねました。でも、何回も何回も地しんが来て、天じようが落ちてきそうでした。そのたびに、わたしは毛布をかぶりました。あんなにこわくて、長い夜ははじめてでした。

「家は大きいぶだから帰るよ。」

次の日、むかえに来てくれたおばあちゃんの顔を見て、わたしは思わず泣いてしまいました。おばあちゃんとは、たった一日会えなかつただけなのに、もう何日も会っていないかつたような気がしました。

帰ると中、つ波でめちゃくちゃになった只越の町の中を歩きました。前の日の朝、学校へ行くときに見た只越とはぜんぜん違うけしきになっていました。

「全部地しんのせいだ。地しんが起きなかつたら、つ波も来なかつたのに。海なんて、大きい。なんで、わたしの名前に海がつつたの。」

わたしは、思わずお母さんにどなっていました。お母さんは、

わたしの様子を見て、おどろいたのか何も言いませんでした。でも、ちよつとかなしい顔をしていました。

あの日からもう五か月がたとうとしています。わたしは、あの日お母さんをどなつたことをあやまりたいと思います。

わたしがまだ、お母さんのおなかの中にいたころ、女の子が生まれてくるのが分かつてお母さんは、名前を考えていました。家から見える青くてきれいな海を見て、ぜつたいに『碧海』とつげようと決めたそうです。

そんなお母さんの思いのように、海も少しずつもとの青い海にもどりはじめています。一日も早く、きれいな海にもどるといいなあと 생각합니다。わたしも、きれいな心をもつたやさしい人になりたいと思います。

「お母さん、碧海、がんばるよ。」

（指導 伊藤 英樹 「60号」）

6年がたつ今

あの日小学二年生だった私も、中学二年生になりました。毎日スクールバスに乗り、唐桑中学校へ通っています。津波で何もかも流された私の故郷は、震災前にそこに何があつたのかも思い出せないほどすっかり変わってしまいました。校庭に建つ仮設住宅、生徒数が減り閉校してしまった通うはずだった小原中学校。津波から大切な命を守ってくれるはずの、粉々に砕けてしまった防潮壁。

そんな私の故郷で変わらないものは、日の光を浴び、碧く輝いている海です。そして、その海とともに暮らしているということ。漁を営み、畑を耕し、神を敬い、新年を祝つてきた故郷。この大切な故郷を守るため、私たち中学生は、「海抜表示プロジェクト」に取り組んでいます。あの日を忘れないために、そして、私の名前「碧海」を誇れるように。

詩

(第一集掲載作品より)

おうち記ねん日

本吉・戸倉 二年 すとう ここも

へいせい二十三年
六月十日

お父さんと お母さんは

へいきな顔して 入っていったけど

もったいなくて 入れない

そつと そつと

入ったの

つま先立ちで 入ったの

わたしの 新しいおうち

入やかせつ

何だか

ごうかマンションみたい

今日から ここが わたしのおうち

どきん どきん

トイレに 行きたい

トイレに 行ったら

あの歌を 歌うの

「トイレには それは それは きれいな

めがみさまが いるんやで」

大きな声で 歌う

ああ すつきり

トイレの水を

ジャー

と ながす

気もちいい

天じょうも ゆかも

ぴっかぴか

めがみさまが いるからかな

おへやは

一つ 二つ

トイレ おふろ だいどころ

わたしの おへやは どこかな

何して あそぼうかな

あつちに 行ったり

こつちに きたり

テーブルの まわりを

ぐるぐる はしりまわる

お父さんと お母さんに

しかられた

しかられたけど

うれしかったの

はじめての 夜ごはん

それは ひっこしそば

かんぱいは ジュース

大人は ビール

まっ白い おうちに

みんなの 音が

ひびいたの

お父さんも お母さんも

弟も わたしも

みんな にここに

楽しいね

ゆつくりしたら

まちにまつてた おふろ

ビシャビシャ

バシャバシャ

弟に 水をかける

いつまでも あそんでた

長く 入って

また しまられたの えへへ

今夜は ふとんをしく お手つだい

お手つだいって 楽しい

はを みがいて

トイレに 行って

ふかふかの おふとんで

おやすみなさい

お父さんのとなりに 弟

弟のとなりに お母さん

お母さんのとなりに わたし

四人で なかよく

ならんで ねたの

今日は 記ねん日

おうち記ねん日

(指導 及川 恵子「60号」)

~~~~~  
私<sup>が</sup>は、小学校一年生のときに津波にいました。毎日笑  
顔<sup>が</sup>が絶えず、毎日楽しかったあの日常をあ<sup>の</sup>時の津波は全て  
奪<sup>つ</sup>つていきました。二年生のときに書いた「おうちきねん日」  
は、私にとつて、仮設に入つたときの気持ち、もの大切さ、  
人<sup>の</sup>のありがたみを思い出させてくれる大切なものになってい  
ます。現在は新しいおうちで毎日皆、ここに生活していま  
す。  
~~~~~

こわかったあるとき

気仙沼・馬籠 四年 林 顕太郎

三月十一日はこわかった

雪がふる夜

毛布にくるまっておにぎりを食べる

寒かった こわかった どうしよう

ねむれない夜だった

ひっこし

気仙沼・月立 一年 よしだ ともえ

八月十四日、あたらしいいえにひっこしてきました。すぐりつぱでした。あたらしいいえがたつてうれしかったです。

へいせい二十三年三月十一日しんさいがありました。わたしはそのとき、なかさいほいくしよにいました。ものすごいしんでした。そのあと、ともだちのかぞくがぞんどんむかえにきて、ともだちがすくなくなっていました。いつもむかえにくるおばあちゃんやさつぱりむかえにきませんでした。先生が、おばあちゃんとおかあさんにメールをして、むかえにこれないことがわかりました。とても、しんぱいになりました。よるは、こうふくじにうつりました。先生たちがいっぱいいて、ずっといっしょにいました。

つぎの日、おかあさんが、あるいてこうふくじにきました。やつとむかえにきてくれたとおもいました。すぐにおかあさんにだつこしました。おかあさんから、アパートにつながるがぶつたこと、車がながされたことをききました。そして、そこにはもうすめないことをききました。おかあさんとなん日もこうふくじにとまりました。そのとき、こうふくじには、たくさんの人がとまっています。

ある日、おかあさんとこうふくじを出て、しんせきのいえにい

きました。そこに、おじいちゃんとおばあちゃんがきました。おじいちゃんとおばあちゃんのかおは、まっくろでした。おじいちゃんのおえが、火じでやけたことをききました。そのしんせきのいえに二、三日とまりました。

そのあと、ちがうしんせきのいえにいつて、しばらくそこにすみました。そこで、あたらしいいえをたてることをききました。となりには、おじいちゃん、おばあちゃんのかぞくがいっしょにいえをたてることをきき、とてもうれしかったです。

あたらしいいえができるまで、かせつじゅうたくにすみました。かせつじゅうたくは、せまくて、あそびにくかったです。つきだて小学校に入学して、学校まで車がかよいました。

八月十四日、あたらしいいえにひっこしてきました。入ってみると、すぐりつぱでした。おふるは、ひろくてピンクいろでした。このおふるでは足のれんしゅうをしたとおもいました。じぶんのへやがありました。いままでじぶんのへやがなかったのので、ベットをおいてのびのびねたいとおもいました。あたらしいうちができてとてもうれしいです。これからたくさんいいおもい出をつくりたいです。

(指導 菊地 丈夫「61号」)

~~~~~ 6年がたつ今 ~~~~~  
 引っこしてから四年半がたちました。低学年のときは、ピンク色のお風呂でコートをかけてもぐったり、バタ足の練習をしたりしました。その結果、今年の市内水泳大会では、自由形五十メートルで二位をとることができました。  
 仮設住宅に住んでいたときは、学校には車で通っていたけど、今は宮交バスで通っています。友達もバスで通うので、いっしょにおしゃべりをするのが毎日楽しいです。

## ぼくの大すきなパパ

気仙沼・鹿折 二年 小原 太陽

パパは今、お空で何をしていますか。さびしくはないですか。ぼくは、パパがいなくてさびしいけれどあつさにまけないで元気です。

ぼくのパパは、きよ年のしんさいで天国にいつてしまいました。パパはいろいろなあそびをいっしょにしてくれ、いろいろなところにもつれて行ってくれました。わりばしでつぼうをたくさん作ってくれたこともおぼえています。

まだようち園だったぼくは、パパが作るようにはできませんでした。でも作っているところをいつも見ていたので、今はパパにまけないくらいのわりばしでつぼうを作れるようになりました。

魚つりにもつれて行ってもらいました。さいしょはなかなかつれませんでした。何回もやっているとうちにやとつれました。小さい魚だったけれどすぐくうれしかったです。パパがつつたことのないメバルをつつたことがあります。その時パパは、

「パパもつたことがないメバルを、先に太陽にとられた。」

と言いました。ぼくは、パパにかつたような気もちですごくうれしかったです。

いろいろなことを知っていたパパに、もっと教えてもらいたかったです。

パパがいなくなつて、いつもママはないてばかりです。ママがないのを見るときぼくもかなしい気もちになります。パパが

いなくなつたのはぼくもかなしいけれど、なっているママを見るのはもつとかなしいです。ぼくは、にこにこしているママがすきなので言うことを聞いたり、お手つだいをしようと思ひました。パパのかわりにママをたすけてあげたいです。

パパに会えないのはさびしいので、ぼくのゆめの中でいいのいつしよにあそびたいです。

お日さまの太陽は、お空からちかいたのでぼくは太陽という名前がすきです。ぼくの名前はパパが考えてくれました。ぼくの生まれた年の八月は、今年のようにあつかつたそうです。そして、お日さまのように明るくみんなをしあわせな気もちにできるやさしい人になつてほしいと、ねがいをこめてパパとママがつけてくれました。

これからもべん強やうんどうなどいろいろなことをがんばるので、いつもお空からぼくを見ておうえんしててください。

(指導 佐竹 達郎) 「61号」

## 近いけど遠いお父さん

気仙沼・小泉 三年 二浦 侑奈

わたしの家では、お父さんとおじいちゃんが海に出て漁をしています。それで、家にはタラ、イサダ、メカジキ、サメ、マンボウ、サンマなどをとる船がありました。お父さんは、おじいちゃんやたのんでいる乗組員さんたちといっしょに海に行くのがとても楽しそう、じゅんびの時はとても生き生きしています。海に出るのが待ちきれないように見えました。

でも、去年三月のつ波で、家も船も、船の道具も車も、全部流されてしまいました。お父さんも、もう少して車ごと流されてしまふところだったそうです。お父さんがぶじでよかつたと心から思います。

わたしは、お父さんといっしょにいられるのでうれしかったけれど、海に出られないお父さんはさびしそうです。

そんなお父さんに、おじいちゃんが、

「家をたてるか、それとも船を買って漁をやるか。」

と聞いたとき、お父さんはすぐに、

「家は後でいいから、船を買ってきても魚をとりたいたい。」

と言ったそうです。家よりも先に船を買って漁に出たいなんて、お父さんにとって海は本当に大切なものなんだなあと思いました。

おじいちゃんとお父さんは、いろいろなところの船を見て回ったけれど、なかなか見つかりませんでした。そのうちに、四く五人くらいの人から、

「船を買ってくれ。」

と、電話があつて、また見て歩き、四月頃岩手県から船を買いました。船が手に入ったお父さんは、ほっとしてうれしそうです。

五月に入ると、お父さんたちは北海道に船を持って行っていろいろなところを直してもらい、八月のサンマ漁に出かけました。わたしは、お父さんと遊ぶのが大好きなので、お父さんがいないときがほしいし、つまりません。だから、大好きな海に行っているお父さんには悪いとは思いますが、いつも、早く帰ってきてほしいなあと思つています。

十二月のころに、やっと帰ってきたときはとってもうれしくて、家にいるお父さんにずっとくっついていました。それを見ていたおばあちゃんは、

「弟のなるやよりあまえんぼうで変な人。」  
と言われました。

せつかく帰ってきたお父さんは、一月四日に船のしゅうりのためまた北海道に行つてしまいました。わたしは、お父さんをこまらせないようにがまんをしていたけれど、なみだが出て止まりませんでした。お父さんはわらいながら、

「また、すぐ帰つて来るから。」

と言つたけれど、お父さんの目にもなみだが見えました。すると、よけいかなしくなり、大声でなき出してしまいました。ごめんね、お父さん。

三月中ごろからイサダ漁が始まるため、船が気仙沼港に回つてきました。でも、次の日からイサダ漁のじゅんびのため、朝早くから夕方までとてもいそがしそうです。近くにいてもあまり会えないお父さんが、遠くにいるように感じました。三月、四月はイサダ漁のときなのに、ふくしま県となりだということで、いつもの半分くらいしかとることができません。それに、ねだんも安くなったそうです。せつかくお父さんとおじいちゃんがはたらいているのに、ざんねんです。

お父さんたちは、新しい船をつくるころがなく、古い船を買つてきたので、イサダをさい後までとらないで、のこっている工事などのため、また北海道に行つてしまいました。いそがしいとなかなか帰つて来ることができないお父さんに、手紙やお守りをたのんでやりました。

「お父さん、いつ帰ってくるの。」

と、電話で言うと、

「いそがしいから、なかなか帰れないよ。」  
と、さみしそうにわらいながら、



「侑奈、がんばれよ。おれもがんばるから。」

と言います。そんなお父さんは、大変でかわいそうです。海の男なので、声は大きく口は悪いけれど、心はとつてもあつたかいです。おじいちゃんとそっくりです。

つ波が来てから、去年はサンマだけ、今年はイサダ少しとサンマ漁だけ。

「早く前みたいにいろんな魚をとりたい。」

と、お父さんたちはいつも言っています。そのためにいつししょうけんめいがんばっているお父さんたちに、こころからかんしゃしています。それで、時々は神様に手を合わせて、お父さんたちの無事とお漁をおねがひしています。

お父さんは北海道に行くとき、

「みんなの言うことを聞くこと、かせつのみんなにあいさつをする、こと、弟のめんどうを見ること。」

と、わたしに言ってきました。わたしはあいさつがとくいじゃないけど、がんばってあいさつをして、お父さんとのやくそくをまもりたいと思います。

（指導 菅原 聖子 「61号」）

## 感しやの気持ち

気仙沼・鹿折 四年 高 須 颯 耶

キャプテンが、

「今日は日本中、世界中のみな様からいただきました心あたたかいごしえんのお礼と、ふっこうに向け、市民、家族、みんなががんばっていることをわたしたちの元気な太鼓にてごほう告したいと思います……。」

と、あいさつしました。ぼくは、（さあ、やるぞ。）と、心の中で気合を入れました。

八月七日、ぼくたち八まん太鼓ジュニアベストチームは、全国消防救助技術大会の東京の会場で大鼓をえんそうしてきました。

えんそうすることが決まったとき、いろいろなことを思い出しました。

平成二十三年三月十一日。

二年生の終わりにしんさいにあつたとき、ぼくの住んでいた鹿折は、地しんによる津波と火事で大きなひがいを受けました。

グラツ、ガタガタ。

「地しんだ。」

その時、学校の教室にいたぼくは、すぐにつくえの下にもぐりました。いつもならとつくにゆれがおさまるのに、長く強くゆれていて、声も出せませんでした。

ゆれがおさまってからみんなで学校近くの高台にひなんしました。

高台では、ウーウーウーと、津波が来ることを知らせるサイレンが鳴りひびいていました。心が落ち着きませんでした。だれも話をする人はいません。あちこちから泣き声も聞こえます。高台でみんなで固まるようにひなんしていたら、津波がじわあつと校庭をぬらすようにやって来ました。そして水がふえていき、大きな学校を、新しくできたばかりの校しやを津波がおそうのを見ました。

こわくて、くやしくて、悲しかったです。

しばらくして高台から、川上にある「興福寺」というお寺までひなんしました。そしてぼくはそのままその日から約二か月間、お寺にお世話になったのです。学校からは上ぐつのままひなんしました。その日はうす暗くて雪がふりはじめ、とても寒かったのを覚えています。

数日後、お母さんと学校の近くまで行きました。道はがれきだらけ。道の向こうのぼくの家の方は、町が火事でもえてなくなっていました。

その時、すぐ近くのバイパスにたくさんの消防車がならんでいて、その消防車には「東京消防庁」と書いてありました。

お寺にもどつてねるときに、お母さんが、

「この興福寺の東京に住んでいるお姉ちゃんも、いち早く東京消防庁に連れられたんだってよ。東京消防庁のみなさんが気仙沼を助けに来てくれたんだよ。」

と言ったのを思い出しました。

ぼくは今回のステージは（ぼくたちの町を助けてくれてありがとうございました。）という感しやの気持ちでえんそうすることを決めました。

ステージ当日、会場の東京たつみ国際水泳場には、たくさんの

お客さんがいて、みなさんがしんけんにはくたちのえんそうを見られてることを感じました。

ぼくたちは、「けんばやし」、「ほうさくのいのり」、「ひびけ！世界の大空に」の三曲をえんそうしました。

えんそうが始まると、お客さんからたくさんのはく手が来しました。最初は「けんばやし」からやりました。ぼくは今回、ベースをたたきました。最後の曲では、ぼくは今までよりも心をこめて力いっぱいたたきました。最後の、

「せいやあ。」

のかけ声の直後にどわっとたくさんのはく手がプール内にひびきわたりぼくはその時、ぼくたちの感しやの気持ちごとどいてると感じて、むねがいつぱいになりました。

たくさんの人たちに助けていただいて今、ぼくたちが元気に学校に通い、友だちと楽しくすごせていることに感しやして、ぼくはがんばります。

（指導 加藤美知子「61号」）

～ 6年がたつ今～  
あの日から五年の月日が流れ、町の復興も進み、いつの間にか私たちの心と体も少しずつ成長している。  
当時以上に「感謝の気持ち」はよりいっそう強くなり、また、その後の様々な経験から、震災を「語り継ぐこと」の大切さを考えさせられる今日である。

